

錢形平次捕物控

くるい咲き

野村胡堂

青空文庫

一

相変らず捕物の名人の銭形平次が、大縮尻おおしくじりをやつて 笹野新三郎に褒められた話。

その発端ほつたんは世にも恐ろしい「畠屋殺し」でした。

「た、大変ツ」

麹町こうじまち 四丁目、畠屋弥助のところにいる職人の勝蔵が、裏口から調子っぱずれな声を出します。

「何だ、また調練場から小蛇はでも這はい出して來たのかい」
と、その頃は贅ぜいの一つにされた、「猿屋」の房楊枝ふさようじを横ぐわ

えにして、弥助の息子の駒次郎が、縁側へ顔を出しました。

「それどころじやねえ」

「町内の騒ぎになるから、少し静かにしてくれ。麹町へ 巨 蟒
なんか出つこはねえ」

「今度のは巨蟒じやねえ、 丈 吉 の野郎が井戸で死んでいるん
だ」

「なんだと」

駒次郎は、跣足はだしで飛降りました。そこから木戸を押すとすぐ釣瓶るべ井戸で、その二間ばかり向うは、隣の屋敷と隔てた長い黒板塀になつております。

丈吉の死体は、井戸端にくみ上げた釣瓶に手を掛けて、そのま

ま崩折れたなりに冷たくなつていたのでした。

抱き起してみると、右の眼へ深々と突き立つたのは、商売物の磨き抜いた畳針。

「あツ」

駒次郎も驚いて手を離しました。

「ね、兄^{あに}哥^き、丈吉の野郎が、何だつて畳針を眼に突つ立てたんでしよう」

「そんな事は解るものか。親父へそう言つてくれ

「親方はまだ寝ていますぜ」

「そんな事に遠慮をする奴があるものか」

勝蔵が主人の弥助を起して来ると、井戸端の騒ぎは際限もなく

大きくなつて行きます。

変死の届出があると、町役人が立会の上、四谷の御用間で朱房さの源吉という顔の良いのが、一応見に来ましたが、裏木戸やら曲者くせものが入つた様子は絶対にないという見込みでした。

それに、丈吉はなかなかの道楽者で諸方に不義理の借金もあり、年中馬鹿馬鹿しい女出入りで悩まされていたので、十人が十人、自害を疑う者はありません。

「持ち合せた畳針で眼を突いて、井戸へ飛込むつもりだつたんだね。ところがここまで来ると力が脱けて井戸へ飛込む勢いもなくなつた——」

朱房の源吉は独り言を言いながら、もつともらしくその辺を見廻したりしました。

「親分の前めえだが、こいつは自害じやありませんぜ」

不意に横合から、変な口を利く奴があります。

「なんだと？」

振り返るとそこに立っているのは、銭形の平次の子分で、お馴染なじみのガラツ八、長い顔を一倍長くして、源吉の後ろから、肩へ首を載つけるように覗いているのでした。

「ね、朱房の親分、井戸へ飛込んで死ぬ気なら、何も痛い思いをして、眼なんか突かなくたつていいでしよう」

「何？」

「それに、商売柄、縄にも庖丁ほうちょうにも不自由があるわけはねえ」
 八五郎は少し調子に乗りました。さすがに死体には手は着けませんが、遠方から唇くちを尖とがらせ、平次仕込みの頭の良いところをチヨツピリ聴かせます。

「手前てめえは何だ」

「へエ——」

「どこから潜もぐつて来やがつた」

源吉の調子は圧倒的でした。

「神田の平次親分のところに居る八五郎で、へエ——」

「ガラツ八は名乗らなくたつて解つてているよ、その長い頸あごが物を言わア、看板に偽りのねえ面つらだ」

「へエ——」

「俺が訊くのは、どこから何の用事で来たか——てんだよ。ここへそんな顎を突つ込むのは繩張ちげ違えだらう」

「朱房の親分、決してそんな訳じやありません。平川天神様へ朝詣りをして、三丁目へ通りかかると町内中の噂うわさだ。知らん振りもなるまいと思うから、ちよいと顔を出したまでで」

「面だけで沢山だ。口なんか出して貰いたくねえ」

「相済みませんが、親分、どう見たつてこれは自害じやありません。自分の手で、眼玉へ畳針を三寸も打ち込めるもんじやありますせんぜ」

ガラツ八も容易に引下がりません。

「目玉へ畳針を当てて、井戸端へ頭を叩きつけたらどうだ」

「それなら井戸端へ血がつくはずじやありませんか」

「血なんか幾らも出ちやいないよ」

「もう一度調べ直して下さい。外から曲者が入つたんではなきやア、家の中の者でしよう。その男は金廻りも悪いが、女癖おんなぐせが悪かつたつて言いますから」

「さア、もう帰つて貰おうか、ガラツ八親分なんざ、物を言うだけ恥を搔かくぜ、——昨夜はあるの良い月だ。井戸端で立ち廻りをやるのを、家の者が知らずにいるはずもなし、第一、人間の眼は八五郎兄哥あにいの前だが、どこかの岡つ引よりは、よっぽど敏捷すばしこいぜ。畠針を突つ立てられるまで、開けつ放しになつちやいねえ、瞬またたき

をするとか、顔を^{そむ}反けるとか、何とかするよ」

「……」

「畳針は真っ直ぐに突つ立つてゐるし、頬にも瞼^{まぶた}にも傷はねえ」
源吉はしたり顔でした。死体になつた丈吉は、衣紋^{えもん}の崩れもなく、瞳^{ひとみ}へ真っ直ぐに立つた畳針を見ると、争いがあつたとは思いも寄らなかつたのです。

「……」

ガラツ八はごくりと固唾^{かたず}を呞みました。丈吉が氣でも違つてい
ない限り、丈夫な繩も、鋭利な庖丁も捨てて、一番無氣味な、一
番不確実な、畳針で死ぬ氣になつた心持が呑込めなかつたのです。
「神田の八五郎兄哥は、この家の中に下手人がいる見込みだとよ、

皆んな顔を並べて、人相でも見せてやんな、——自棄に良い男が揃つているじやないか。女出入りなら駒次郎兄哥などが早速やられる口だぜ。金が欲しきやア、弥助親方だ、——何だつてまた選よリに選つて、醜男ぶおとこで空つ尻からけつで、取柄とりえも意氣地うきぢもねえ丈吉などの眼玉を狙つたんだ」

朱房の源吉は、井戸端に集まつた多勢の顔を見渡しながら、い心持そうにこんな事を言いました。

主人の弥助は五十を越した年配、その伴せがれ駒次郎は取つて二十三、これは山の手の娘に大騒ぎされている男前、職人の勝蔵も、二十五六の苦み走つた男、源吉が言うのは、まんざら出鱈目でたらめではなかつたのです。

「やい、八兄哥、帰つたら平次へそう言いな、近頃少し評判がいいようだが、あんまり出しや張るところくな事はあるめえ——とな」
 シヨンボリ帰つて行くガラツ八の後ろ姿へ、源吉は思う存分の悪罵あくばを浴びせました。平次にはよっぽど怨みうらがある様子です。

二

「親分、こういうわけだ、あつしは何と言われたつて構わねえが、親分の事まであんなに言われちや我慢がならねえ。お願ひだから四丁目まで行つてやつておくんなさい。源吉の鼻をあかさなきやア、この稼業かぎょうは今日限り止よしだ。足を洗つて紙屑かみくず拾いでも何

でもやりますよ」

ガラツ八の折入った様子は、世にも不思議な痛々しさでした。
浴衣の尻を端折つて、朝顔の鉢の世話を焼いていた平次も、思わず真剣な顔を挙げます。

「たいそう腹を立てたんだな八、手前にも似合わない」

「腹も立てますよ、親分」

「まあいい、俺にまで喰つてかられちゃ叶かない、ちよつと行つてみるだけでも、見てやろうか」

と平次。

「親分、本当に行つて下さるか」

「八の顔だつて汚しつ放しにはなるめえ、それに、話の様子じや、

俺が考えても自害じやねえ」

「有難てえ、それでこそ銭形の親分だ」

「馬鹿野郎、おだてに乗つて出かけるわけじやねえぞ」

「へツ、へツ」

ガラツ八は自分の額をピシヤピシヤ叩いておりました。この心服し切つている親分から「馬鹿野郎」と叱られる度に、嬉しくて嬉しくてたまらない様子です。

四丁目の畠屋へ行つたのは、巳刻^{よつ}（十時）少し過ぎ、朱房の源吉は引揚げましたが、幸い丈吉の死体は、筵^{むしろ}を掛けたまま、まだそのままにしてありました。

「フーム」

筵を除つて一目、平次は呻うなりました。忙せわしく四方あたりの様子を見廻して、もう一度ガラツ八の顔に還つた瞳めには、「——よく疑つた」というような色がチラリと見えるのでした。

「ね、親分、誰かに殺ばらされたに違いないでしよう」

少しばかりガラツ八の鼻は蠢うごめきます。

「そんな事が解るものか——これだけ力任せに置針を刺すうち、凝じつとしているのは可お怪しきな」

「眠つて いるところをやられたら?」

ガラツ八、今度は少し不安になりました。

「井戸端で眼を開いて寝ている奴はない」

「酔つ払つていたらどうです」

とガラツ八。

「丈吉は生れつきの下戸で、樽たる 柿がきを食つても赤くなる野郎でしたよ」

主人の弥助は後ろから口を出しました。せつかく朱房の源吉が自害にして運んでいるのを、変な場違い野郎が飛出して、「殺しにしよう」という態度が癪しゃくにさわってたまらなかつたのです。

「親分、向うの二階から手裏剣しゆりけんを飛ばしたらどんなものでしょう」

ガラツ八はそつと囁ささやきます。畠屋の裏は黒板塀を隔てて、しもたやが二軒、一軒は平屋ひらやの女世帯、一軒は裕福な浪人者の住居すまい、こちらの方には、小さい二階があつたのです。

「少し遠いな、——それに、畠針は手裏剣には少し軽いからあの二階から打つたんでは、頬に傷をつけるぐらいが精々だ。眼玉を狙つて三寸も打ち込むわけには行くまい」

「……」

ガラツ八は黙つてしましました。せつかく神田から引張り出してきた親分の平次も、これでは源吉と大した変りはありません。弥助も、その倅の駒次郎も、職人の勝蔵も口には出しませんが——好い気味だ——といった顔で、ガラツ八の照れ臭い様子を眺めております。

「お隣はどんな人が住んでいなさるんで?」

平次は改めて弥助に訊きました。

「右の方は下町の物持のお嬢さんが一人、何でも 妾腹しょうふくで御本宅がやかましいとかで、下女が二人ついて暢氣のんきに暮していますよ、お名前はお町さん——」

「左の方は」

「御浪人ですが、これは大藩の御留守居をなすつた方で、お金がうんとあります。町内の質屋に資本もとでを廻して、お子様と二人暮し、——お子様といったところで、もう二十歳はたち近いお嬢さんで、これはお綺麗な方です」

弥助は揉手もみてをしながら、自分のことのようにニコニコしております。よほど浪人と懇意こんいにしている様子です。

「お年は?」

「厄少^{やく}し過ぎでしようか、お名前は大里玄十郎様、立派な方でござります」

三

平次は一応現場を調べた上、町内の質屋へ行つてみました。

大里玄十郎の暮し向きの事を訊くと質屋の主人^{あるじ}が言つたのは、まるつきり大嘘、質屋へ資本^{もと}を廻して^{ある}いるどころか、その日の物には困らないまでも、暮しが贅沢^{ぜいたく}など、娘のお才が派手好みなので、内々、腰の物までも曲げることがあるという話――

「近頃質屋とすつかり昵懇^{じつこん}になつたようですから、いずれあの

娘を、駒次郎へ押しつけるつもりでしよう。この節の武家は、そんな事をなんとも思つちやおりませんよ。——それにあの畠屋は一丁目から御見附おみつけまで、表通りには、及ぶ者もない物持ですからね」

そつと、こんな立入ったことまで教えてくれました。

平次はその足ですぐ大里玄十郎の格子の外に立ちました。

「何？ 錢形の平次が参つた、ちようどいい 塩梅あんばいだ、こつちにも言いたいことがある」

一刀を提げて、上がり框かまちにヌツと突つ立つたのは、青鬚あおひげの跡

すさ凄まじい中年の浪人です。

「恐れ入りますが、ちよつとお嬢様に御目に掛りとうござります

が」

「懇
いんぎん 懇な平次を尻目に見て、

「馬鹿奴^めツ、手先御用間に口をきくような娘は持たぬぞ——この家の二階から手裏剣を打つて丈吉を殺した——などと言つた奴がある。そうだが、とんでもない野郎だ。十間以上離れたところから畳針を飛ばして、人の命をとるほどの腕があれば、浪人などはしていなぞ」

「恐れ入ります」

「恐れ入つたら帰れ帰れ、畠屋の職人を殺すほど怨みも理由もある拙者ではない。この上用事があるなら、せめて町方の役人を伴つれて来い、馬鹿馬鹿しい」

いやもう滅茶滅茶です。

「とんだお邪魔をいたしました、御免」

平次とガラツ八は、キリキリ舞いをして引下がりました。何心なく振り返ると、袖垣そでがきの上から一と目に見える縁側に、はたち二十歳ばかりの武家風とも町家風ともつかぬ娘が立つて、二人の後ろ姿を見送っているのと、顔を見合せてしました。

背の高い、少し骨張った娘ですが、何となく艶なまめかしい十人並に優れた美しさです。

「親分、済まねえ、手裏剣は間違いだつたネ」

追いすがるようにガラツ八。

「最初はなつから俺はそんな事を考えちやいねえよ」

「じゃ、やはり自分の眼へ針を刺して井戸端へ頭をぶつけたんで

とガラツ八。

「そんな事が出来る芸当かどうか、やつてみな」

「へツ」

そんな事を言いながら、二人はもう一軒の隣、お町という娘の住んでいる家の格子の外に立つておりました。

「お町さんは居なさるかい。神田の平次だが、ちよいと逢つて下さい」

「へエ——」

年頃の下女は奥へ飛んで行きました。隣に騒ぎのあつたことは

知つてゐるはずですから、神田の平次という言葉がピンと来たのでしよう。

しばらくすると、

「あの、済みませんが、お嬢さんは寝やすんであります、え、お風邪かぜでございます。どんな御用でしよう?」

先刻の下女が物に怯おびえたように、畳の上へ手を突いているのでした。

「風邪? それはいけないな、夏の風邪は抜け難いから、用心なさるがいい、いつから寝なすつたんだ」

平次の調子は至つて平坦でした。

「ゆうべ昨夜宵のうちからお加減が悪そうでしたが、今朝はもう起きて

いらっしゃいません

「そうかい」

「あの、御用は？」

「なアに、大した事ではないが、——隣の畠屋の職人が死んだのをお聞きなすつたろう」

「へエ」

「あれは、人に殺されたんだと思うんだ。心当たりはあるまいね」

「いえ、何にも」

「あの丈吉とかいう男は、時々ここへ来ることがあつたかい」

「一度もいらっしゃいません。私などはお顔もろくに知らないくらいで——」

「駒次郎兄哥は時々来るだろうね」

「へエ——」

「そう言つて下女はハツと袖口で口をおお覆いましたが続けて、
「でも、でもあの、近頃はさっぱりいらつしやいません」

「そうだろう、大里様のお才さんと近いうちに祝言するそ
うだから

ら
「………」

妙に探り合いのような撲くすぐつたい空氣です。

「お嬢さんにはお目に掛るまでもないんだが、その代りあの屏の
あたりを見せて貰いたいよ、丈吉殺しの曲者が、あの辺から屏を
越して行つたかも知れないんでネ」

「……」

下女が返事をする前に、ガラツ八を目で麾さしまねいた平次は、畳屋との境になつてゐる黒板塀の方へ近づきました。

南を塞ふさがれてゐるので、草花の育ちそうもない塀の下は、ジメジメした苔こけの上に、女下駄の跡だけが幾つかほのかに読めます。

「親分、男なんざ入つた様子はありませんね。それにこの塀ときた日にや、まさか人間は潜られないが、バツタ、カマキリ、蝶ちょう々、蜻蛉とんぼは潜り放題だ」

全くその通りでした。畠屋の方こそ、黒々と塗つて、大した不体裁もありませんが、こちらの方は見る影もなく荒れて、支えの柱は所々歪ゆがんだまま、曝さらされきつた板は、灰色に腐ふしょく蝕よして、所

々に節穴さえ開いております。

平次とガラツ八が堀際を離れて元の格子戸の前へ来ると、青い顔をした娘が少し取り乱した姿で目礼をしておりました。

「お町さんでしようね、とんだお邪魔をしました」

「どういたしまして」

「気分はどうです」

平次は格子の中へ入つて、言葉はひどく丁寧ですが、いつもに似ぬ図々しい態度で上がり框かまちに腰を下ろしました。

「有難うございます、大したことはございません」

何という痛々しい感じのする娘でしよう。白粉おしろいつ気のない初

々しさも充分に美しいのですが、可哀想に眉から左の耳へかけて

火の燃えるような、赤癌あかあざです。

「そんな事で変な氣を起しちゃならねえ」

平次はつかぬ事を言つて、この娘の宿命的な醜い半面を見詰めました。右半面がお才などは足許にも寄りつけぬほど美しいのに、これはまた、何という造化の悪戯いたずらでしょう。血と肉で出来た大傑作いけっさくへ何か気に染まぬ事があつて、赤い絵の具皿を叩きつけたといった顔です。

「ところで、女世帯では何かと物騒だろう。隣の畠屋を見張らせながら、ごく用心の良い男を一人置いて行くが、泊めて下さるでしょうね」

「えツ」

「八、手前てめえ今晚から、当分ここに泊つてあるんだよ、用心棒に」

「親分、あつしが？」

「そうよ、若い女の中へ転がしておくには、手前のような用心の
好い男は滅多にねえ」

「チエツ、情けねえことになりやがったな」

「頼んだよ、八」

平次はろくに返事も聽かず、そのまま神田へ引揚げました。

「弱つたなア、どうも、驚いたなア」

後に残された八五郎の弱りようというものはありません。

若い女二人の白い眼に射竦められて、いつまでもじもじして
いることでしょう。

四

「親分、大変な事になつたぜ」

「また大変かい、八の大変に驚いていた日にや、御用聞が勤まらねえ」

平次は縁側で相變らず朝顔の世話に余念もありません。

「立派な御用聞が朝顔道楽を始めるようじや——」

「なんだと、八」

「へツ、へツ、天下は泰平だつて話で」

「馬鹿にしちゃいけねえ、——ところでその大変というのは何だ」

「また一人死にましたぜ」

「何？ どうどうお町が死んだのか」

平次は朝顔を投ほうり出すように立上がりました。

「お町——とどうして解るんで」

ガラツ八の鼻はキナ臭くうごめ蠢きます。

「俺はそれが危ないと思つたからお前を泊めたんだ、なんだつて夜つびて見張つていねえ」

「それは無理だよ親分、そう言つてくれさえすりやア、あの娘の首つ玉へでも齧かじりついていたのに、あつしは外から来る野郎ばかり見張つていたんだ」

ガラツ八は叱られながらはなはだ不服そうです。

「とにかく行つてみよう、もうこれつきりだらうと思うが、一応見ておかないと、後々のことが安心ならねえ」

二人はすぐさま飛出しました。

麹町四丁目の、お町の家へ行つてみると、隣の畠屋の井戸から引揚げて来たばかりのお町の死体は乾いた物に着換えさせて、二人の下女と、それから、日本橋から駆けつけたという、お町の姉というのが、線香たを焚いたり、鉢かねを叩いたり、泣き濡れて拝んでばかりおりました。

「畠屋の井戸へ飛込んだのかい、なるほどこつちの方が少し深い」
平次は今さらそんな事まで感心しております。

「銭形の、御苦勞だね」

畠屋からノソリと出て来たのは朱房の源吉、朝つからアルコールが胃嚢へ入つたらしく、赤い顔と据つた眼が、なんとなく挑戦的です。

「朱房の兄哥あにき、八五郎の奴がとんだお節介をして済まなかつたねえ、勘弁してくんな」

平次は微笑をさえ浮かべて、蟠りのない調子でこう言いました。
 「なアに、自害が自害と解りさえすりやアそれでいいのさ。人殺しの下手人が解らなかつたとなると、この辺を繩張にしている、この源吉の顔に拘わるというものだ、——なア八兄哥あにい、今度はお町は井戸へ投げ込まれたに違えねえなんて言わないことだぜ」

「そんな事を言やしません」

八五郎は盆の窪ほんくぼのあたりを搔いております。

「丈吉とお町は言い交した仲さ、——丈吉が借金だらけで自害したんで、お町がその後を追うつもりで、わざわざこの井戸までやつて来て身を投げた——とね、本阿弥ほんあみが夫婦づれで來ても、この鑑定に間違まちがいはあるめえ」

朱房の源吉は本当にしたり顔でした。

お町の家へ引返して来ると、姉のお勢せいはすっかり心を取り直したものか、薄化粧までして平次とガラツ八を迎えました。

二十七八——どうかしたらもう少し若いでしようが、とにかく、素晴らしい肉体を持つた女で、その妖艶ようえんな美しさは興奮した後だけに、かえつて眼の覚めるようです。若い雌鹿めじかのように均勢の

とれた四肢^{てあし}、骨細のくせに、よく脂^{あぶら}の乗つた皮膚^{つや}などは、桃色真珠を見るようで、側へ寄つただけで、一種異様な香氣を発散して、誰でも酔わせずには措^おかないといつた、不思議な種類の女だつたのです。

「お、人形町の師匠じやないか」

「あら、銭形の親分」

取り繕つたところをみると、紛れもありません。それは人形町で踊りの師匠をしている、有名すぎるほど有名な女だつたのです。
「お町さんの姉^こというのは、師匠だつたのかい」

「え、あの娘^こも本当に可哀想な事をしました。思い詰めた事があつたら、それと私に相談してくれればいいものを」

お勢は新しく湧いて来る涙をどうすることも出来ずに、身を捻つて、袖口を顔に押当てました。痛ましくも顫ふるえる肩のあたり、何という艶なまめかしくも美しい悲しみの姿態ポーズでしよう。

「気の毒だつたネ、そんな事もありはしないかと思つて、八五郎を側へ付けておいたんだが——」

「そうですつてね、本当に親分さんの思いやりは、どんなに有難いと思つたか——でも、死ぬ気になつた者は、どんな隙すきでも見つけます。八さんのせいにしちやお氣の毒じやございませんか」

「まあまあ、あんまり泣くのも妹さんのために良いことじやあるまい、諦めろと言つては薄情だがあきら」

「有難うございます、親分さん」

平次はいい加減にして神田へ引揚げました。事件はこれで何もかも大団円になつたようですが、平次の心の中にはまだまだ済まない事ばかりです。

「八、気の毒だが、これから三日に一度ぐらいずつ四丁目へ行ってみてくれ」

「四丁目？」

「麹町四丁目だよ。畠屋と大里とかいう浪人の家と、それからお町の家へ当分姉のお勢が住む事になつたそうだから、ついでにそれも見廻るんだ」

「まだあの辺に何かあるんですかい、親分」

「これから本当の芝居が始まるだろうよ、見ているがいい」

平次は、何やら呑込み顔にうなざきます。

五

それから十五六日、平次は外ほかの大きな事件に首を突つ込んで、早出の遅帰りを続けたために、ガラツ八に逢う機会もありませんでした。

「親分、驚いたぜ、全く」

ガラツ八はどうとう平次を捕まえました。

平手で長い顎あごから頬を撫でて、恐ろしく揺くすぐついたい顔をして見せるのでした。

「何に驚いたんだ、——また四丁目で誰か死んだのかい」

「そこまでは行かねえ、が、あのお勢がどうかしたんだ」

「…………」

「妹の家へ入り込んだはいいが、近頃は恐ろしく若作りで妹の三十五日も済まないうちから、町内の若い者を集めて、浮れ切つているんだ」

「フーム

「日髪日化粧

で、どう見たつて二十二三だ。大変な化物だぜ、

あの女は」

「それがどうしたんだ、お前が口説くぞ

「へツ、口説きもどうもしねえが、あんまり色っぽいんで、気味

が悪くて、長居は出来ねえ」

「たいそう気が弱いじゃないか」

「だまされると思つて、親分も一度行つてみなさるがいい、
請合うけあい

二三日はボーツとするから」

「それは面白かろう、見ぬは末代まつだいの恥だ、すぐ行くとしようか」

「お静さんが氣を悪くしなきやアいいが」

「何をつまらねえ」

二人はもう日が暮れたというのに、麹町四丁目までやつて来ました。

「お勢さん、親分を伴れて來たぜ」

案内役のガラツ八は、顎から手を外して、格子を開けます。

「あら親分、その後はすつかり御見限りねえ、でもまあよく」といつた調子、荒い浴衣の袖を翻かえして、ニッコリすると、その辺じゅう桃色の媚こびが撒まき散らされて、何もかも匂いそうです。

「これは驚いた」

「あら、何を驚いてらつしやるの親分、ちょうど淋しがつているところよ、ゆつくりなすつてもいいでしよう」

手を取つていきなり奥へ。

人形町に居る時は、色白の素顔を自慢したお勢、どう踏んでも三十がらみに見えた大年増でしたが、厚化粧に筐さきべに紅の極彩色をして、精いっぱいの媚と、踊りで鍛えた若々しい身のこなしを見ると、二十二三より上ではありません。

どつちが本当のお勢なのか、こうなると平次も見当がつかなくなるくらい。

「驚いたね、どうも、お勢さんがそんなに若いとは思わなかつたよ」

照れ隠しに煙草ばかり燻らしてあります。
くゆ

それから酒。

十重二十重とえはたえに投げかける妖あやしの網を切り破るように、平次が神

田へ帰つて来たのは、もう夜中過ぎでした。

それからは平次の意気込みも違い、ガラツ八の報告も急に活気づきました。

畠屋の勝蔵がせつせとお隣へ通い始めた、という報告があつて

から十日ばかり経つと、今度は畠屋の息子の駒次郎が急にお勢に熱くなり出して、町内の狼連おおかみれんも、好い男の勝蔵も、少し顔負けがしていると言つて來ました。

お勢の妖しい魅力は、間もなく麹町中の若い者を氣違いにするのではあるまいかと思うようでした。

猛烈な達引たてひきと鞘さや當あての中に、駒次郎が次第に頭を擡もたげ、町内の若い衆も、勝蔵も排斥して、お勢の愛を一人占めにして行く様子でした。

油のように行渡る年増の愛情は、駒次郎をすつかり夢中にさせて、もう大里玄十郎の娘お才などの事を考えている余裕もなくなつてしまつた様子です。

「何かきつと起りますぜ」

ガラツ八がそう言つて、額を叩いたり、手を揉んだりしたのは、お町が死んで四十日目あたりのことです。

六

「いよいよ大変だ、親分」

ガラツ八が飛込んで来たのは、もう日射しの秋らしくなつて、縁側の朝顔も朝々の美しい装よそおいが衰えかけた時分の事でした。

「また大変か、今度は誰の番だ」

「畠屋の駒次郎が殺やられましたぜ」

「今度は自害じやあるまい」

「畠庵丁で、首を右から後ろへ半分も切るなんてことは、朱房の親分が見たつて自害にはならねえ」

「よしッ、行つてみよう」

平次はすぐ飛んで行きました。

畠屋の裏木戸を入つて、群がる野次馬を搔き分けるように井戸端へ近づくと、井戸と物置の間の朝顔の垣根の中に、畠屋の息子の駒次郎が、紅あけに染んで倒れていたのでした。

「銭形の兄哥、御苦勞だね」

「おや朱房の兄哥」

「下手人は拳がつたよ」

「へエ——」

「職人の勝蔵さ、隣へ引越して来た踊りの師匠を張り合つて、主
人の息子を殺したんだ」^{るじぱら}

源吉はだいぶ好い心持そうです。

「本人は口を割つたろうか」

「知らぬ存ぜぬだ、いづれは少し痛めなきやアなるまい」

「証拠は？」

「何にもねえ——と言いたいところだが、ありすぎて困つている
んだ。刃物は勝蔵の使つている畳庖丁だ、——もつとも本人は井
戸端へ忘れて置いたつていうが、良い職人が道具を井戸端へ忘れ
るはずはねえ、それに、昨夜駒次郎が外へ出たがるのを、ひどく

気にしていたそうだ」

源吉のいう証拠はあまりに通り一遍のものです。

「駒次郎を怨む者は、まだ外にもあるはずだ。怨みだけで言えば、町内の若い者が半分ほどは下手人の疑いがある。それから、大きい声じやいえないと、娘を捨てられて怒っている浪人者もいるぜ」

「大里玄十郎か」

「まあね」

「そんな事を言つたつて、勝蔵が下手人でないとは決らないぜ、

俺はともかく八丁堀へ行つて来る。町内の若い者なり、浪人なり
を縛るしばがよからうよ」

朱房の源吉は、いや味を言いながら行つてしましました。

町内の若い者、半分は下手人の疑い——と聞いて怯えたのか、路地を埋めた野次馬は、一人去り二人帰り、間もなくだいぶ消えてしまします。

「親分、本当に勝蔵じやありませんか」

ガラツ八は少し心配そうです。

「解らないよ、だがね、八、駒次郎の傷は、喉笛のどぶえの右側から始まつて、大して深くはないが、首を半分切り落すほど後ろへ長々と引いているぜ、正面から向つた相手がこんな芸当が出来るかしら」

「斬つて下さいと首を突き出したようだ——つて親分は言うんでしよう」

「その通りだよ」

「うしろ背後から切つたとしたら」

「抱きついて念入りに刃物を引かなきやア、こうは斬れない」
平次の言うことはだいぶ変つておりました。

「じゃ親分、どういうことになるんで」

「まだ何にも解っちゃいないが、畠庵丁のような短い得物で、これだけ念入りに斬ると、下手人はうんと血を浴びたことだろうな」
「…………」

「勝蔵の持物をみんな見せて貰ってくれ、血の付いたものが一つでもあれば下手人だ」

「へエ——」

ガラツ八は飛んで行きましたが、間もなくつままれたような顔をして帰つてきました。

「血なんか付いた物は一つもありません」

「床下や天井裏や押入には」

「待つて下さい」

ガラツ八はもう一度飛んで行きましたが、どこにも怪しい物は見付かりません。

「なきやアいい。住込みの職人が、着物を一と揃いなくして、人に気づかれないはずはない。やはり勝蔵じやなかつたんだろう、そろ

——念のために水を一と釣瓶汲んでみろ——井戸へ沈めた様子もないだろう」

「…………」

「ところで八、俺は近頃朝顔を咲かせて楽しんでいるが、自分で育てる、草花も、我が子のように可愛いものだ」

「…………」

平次が人殺しの現場で、いきなり朝顔の話を始めたので、ガラツ八も呆気あつけに取られております。

「草花を可愛がる心持は、また格別だよ。自分で育てないので、折れたり、散らされたりすると、我慢が出来ない」

「…………」

「駒次郎を殺した下手人は、朝顔の垣のを除けて大廻りして逃げている。こんな優しい人殺しは珍しかろう」

「……」

「荒っぽい男や、浪人者の仕業じやねえ」

「……」

「八、俺はもう下手人探し^{いや}が厭になつたよ。こんな時は熱いお茶でも飲んで、休むんだね」

平次はそんな事を言いながら、隣の家へ引揚げました。

七

「まあ、親分」

「お勢、これはどうした」

家のなかはガランとして、下女の姿も見えない上、昨日までは、あんなに厚化粧の若作りだつたお勢が、白粉も紅も洗い落して、元の素顔に、無造作な櫛巻くしまき、男物のような地味な单衣ひとりえを着ているのでした。

「引越しですよ、私はやはり人形町の方が水に合いそうで——」「それもよかろう、——ところで、俺もつくづく岡つ引が厭になつたよ」

「まあ」

「気の毒だがお茶でも貰おうか」

平次は庭から縁側へ廻つて、青桐あおぎりの葉影の落ちるあたりへ腰を下ろすと、お勢はいそいそと立つて渋茶を一杯、それに豆落まめらく

雁がんを少しばかり添えて出しました。

「お勢、今日一日俺は岡つ引じやねえ、お前の昔馴染——まあ、兄貴か友達と思つて話してくれ」

「…………」

平次の言葉は急にしんみりしました。

「俺は、口幅つたいようだが、この間からの不思議な事の経緯いきさつを、何もかも知つているつもりだ。最初から話してみよう、もし違つたところがあるならそう言つてくれ」

「…………」

お勢は首をうなだれました。白粉つ気がないとやはり元の三十前後の大年増ですが、その物淋しい美しさは、極彩色のお勢より

はかえつて清らかで魅力的であります。

「駒次郎は、お前の妹のお町と言い交していた。かなり深い仲だつたに相違ない、毎晩合図をしては、あの屏を挟んで両方から話したり、笑つたり、泣いたりしていたんだ——それが、大里玄十郎父娘が引越して来ると、駒次郎の心は急にお才の方へ傾いてしまつた。父親の弥助も、武家の娘を畠屋の嫁にするつもりですつかり夢中になつて、あの大里玄十郎がおおぼらふき大法螺吹の山師だとは気がつかなかつたんだ」

「…………」

「お町は毎晩合図をしたが、駒次郎はもう屏の側へ来てはくれなかつた。で、とうとう我慢がし切れなくなつて、切れてやるから、

たつた一度だけ逢つてくれ——と言つてやつた

「…………」

「その手紙を見付けたのは丈吉だ。お町に氣があつたから、駒次郎のふりをして塀の向う側へやつて来て、駒次郎がするよう、塀の穴へ眼を当てて見た。お町はそのとき駒次郎を殺して、自分も死ぬ氣だつたんだ、いつぞや駒次郎が自分の家へ忘れて行つた畠針を持ち出して塀のこつちから、一思いに眼を突いた」

「…………」

「丈吉は声を立てたかも知れないが、なにぶんの深傷ふかでで、井戸端へ行くのが精々だつた。釣瓶の水で眼を冷そうとしたが、急に力が抜けて井戸端に突つ伏して死んでしまつた。眼を洗わなかつた

証拠には丈吉の右の眼には少しばかり墨が付いていた、たつたそれだけの事で俺は何もかも見破つたような気がした

「…………」

何という明智でしょう。平次の言葉は、見て来たようにはつきりしております。

「俺は大方察したが、お町が殺したという証拠は一つもない、それに、男に捨てられたお町の心持がいじらしかった——万一自害するような事があつてはならぬと思い、それとなく戒めた上、八五郎を付けておいたが、やはりその晩身投げをしてしまつた。可哀想だが、俺には救いようがなかつたのだよ」

「…………」

「それから、お前が出て来た。妹のかたき敵を討つつもりで、本心にもない厚化粧に浮身うきみをやつし、町内の若い者を集めて、駒次郎の気を引いた、——浮氣な駒次郎はお才を振り捨ててお前のところへ來たが、女郎蜘蛛じょろうぐもの網に掛った虫のように、どうすることも出来なくなつたのだ」

「…………」

「物置の前で逢引をした晩、井戸端に勝蔵が忘れて行つた庖丁を見ると、お前は急に駒次郎を殺す気になつた。抱き付いてくるのを、自由にされるような振りをして、背後うしろから庖丁の手を廻して、喉から後ろへ存分に斬つた」

「…………」

「朝顔の垣を踏み倒すのが可哀想になつて、お前は廻り道してこ
こへ逃げ帰り、血だらけになつた着物を始末し、白粉も紅も洗い
落して、元のお勢になつた」

「…………」

「どうだ、違つたところがあるか」

平次の話は微びに入り細うがを穿ちました。語りおわつて顔を擧げる
と、お勢は三鉢四鉢大輪の朝顔を並べた縁に突つ伏して、正体も
なく泣いているのでした。

「親分、一々その通り、寸分の違いもありません。さア、私を縛
つて下さい」

「いや、縛るとはまだ言わないはずだ」

「けれど、これだけは御存じなかつたでしよう。お町は私の娘——天にも地にも、たつた一人の生みの娘だつたんです」

「え、お前の娘、——年が近過ぎるようだが」

「近いもんですか、お町は十八、私は三十四」

「三十四？」

「日本橋の大店おおだなの若旦那との間に、——私が十六の時生んだ娘こでした。お店に置くのが面倒で、月々仕送つて頂いてここに置きました。私の側へ置くと、筋の悪い狼達おおかみが集まつて来て、ろくな事を教えないだろうと思つたのがかえつて間違もといの基もとだつたのです」

「それは——」

「娘のお町が死んだ時、私も死んでしまいたいと思いましたが、身仕舞して鏡を見ると、まだまだ私には若さも綺麗さも残つていて思つたので、一と芝居打つてみる気になりました。武家育ちの張子細工^{はりございく}のような娘に負けようとは思いません」

「…………」

「私は勝ちました。^{どたんば}土壇場ですつぽかして、駒次郎に首でも縊らせようと思つたのが、あんまり執拗^{しつづ}こく絡みつかれて、ツイ庖丁を振り上げてしましました。私は娘を騙^{だま}した男に、どんな事があつても身は任せません」

お勢はもう泣いてはいませんでした。真っ直ぐに目を起すと、観念し切つた殉教者^{こうごう}のような清らかさが、その蒼白い顔を神々

しくさえ見せるのでした。

「お勢、俺は今日一日岡つ引じやないと言つたはずだ。——駒次郎は鎌^{かま}鼬^{いたち}にやられて死んだんだよ。放つておけば証拠がないから、誰も気がつくはずはない、勝蔵は笹野の旦那にお願いして、縄を解いて貰う手もある」

「親分」

「解つたかお勢。——人を殺したのは悪いが、俺には縛る力はない、——せめて死んだ人達の後生^{とむら}を弔つてやれ。解つたか」

「ハイ」

お勢も、側で聞く八五郎も、すっかり泣き濡れて、しばらくは顔も挙げませんでした。

*

お勢はその後踊りの師匠を廃して、お町を葬つた寺の花屋の株を買い取りました。美しく清らかな花屋のおかみがしばらくの間江戸の評判だつた事はいうまでもありません。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（四）城の絵図面」嶋中文庫、嶋中書店
2004（平成16）年8月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「ホール讀物」文藝春秋社

1934（昭和9）年7月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年5月27日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

くるい咲き

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>